



## 林 由起子

医学科  
病態生理学分野  
主任教授

東京医科大学卒業  
順天堂大学博士課程修了  
博士（医学）  
2013年より現職

### これまでの道のり

子どものころから、医者になりたいと漠然と思っていました。高校ではっきり進路を決めて医学部に進み、専門領域を決めるときには、脳に関係のある分野に就きたいと思い、神経内科を選びました。本学を離れて、医者としての経験を5年積み、学位をとるために研究所に移ったのが、ちょうど出産直前でした。

子どもが小さいときに時間的に拘束が長い臨床に戻る不安もありましたが、何より研究が楽しくて、振り返ると仕事イコール研究イコール趣味になっていました。

次の転機は、同じラボに長く居たので、次世代の育成のためにも自分のポストを若い人たちに譲り、新たな環境に挑戦しようとチャレンジをした結果、主任教授として本学に戻りました。自分のラボを持ち、自分のやりたい研究ができるというのも楽しいです。

### 研究テーマ (一言でいうと)

筋ジストロフィーをはじめとした神経・筋肉の病気を研究しています。筋肉の中に展開される細胞の生命現象を見ながら、わからないことを解明し、治療法の開発をめざしています。

### 研究を続けられた モチベーション

上司は出産直前の私を研究員として迎え入れてくれて、勤務時間に制約のある私に、ただの一度もいやな顔を見せたことはありませんでした。これは大きな力になりました。周りに迷惑をかけていましたが、時間のない私に、「続きはしておきますよ」と手を差し伸べてくれる仲間にも恵まれました。

父は転勤族で、やりたいことをあきらめた母を見ていたので、自分はずっと社会人として自立していくと決めていました。自分が受けた教育、積んできた経験を思うと、大変な時も仕事を辞めようとは考えもしませんでした。

大学の同級生だった夫も、私が仕事を辞めるとは思っていませんでした。キャリアを積むタイミングもお互いに理解ができていましたので、私ができないときは料理もして、子どもの面倒もよくみてくれていました。とても感謝しています。

### 研究の魅力、これからの夢

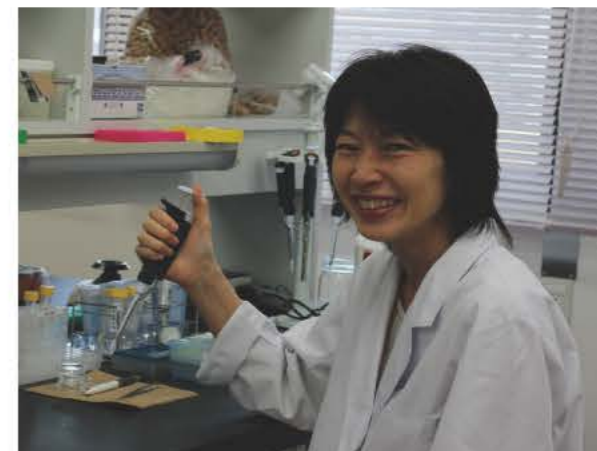
病気を知ると、こんなにわかっていないことがあるのかと思います。わからないことを文献で探し、それでもわからなかったことを自分で解決することができるのです。誰も見つけていないことを世界中で一番最初に見つけた時の感動は大きく、研究は止められません。生命科学の進歩に貢献し、患者さんの治療につながるようなこと、人類の役に立つかもしれないことをできるだけ多く成し遂げるとするのが夢でしょうか。

## 一時的に休むことがあっても、 ライフイベントは辞める理由 にはならない

### 未来の女性研究者への応援メッセージ

自分が何をやりたいのか、どこに優先順位をおくのか、  
時間配分を考えて継続してほしい

研究は失敗ばかり多い中にほんの少し何かが発見できるといったものですし、結果が出るまでに5~10年と長い時間がかかることも多いです。途中で自分が折れたり、あきらめたりしないためには、どんな小さなことも成功と思える気持ちを持つことが大事のように思います。子育てで一時的に休むことがあっても、自分の優先順位をしっかり見極め、回り道でも続けてほしいです。子育て中に他人が介入することで解決することがあれば「ヘルプ」と声を出してください。女性が働き続けやすいような環境を整えていくことに私も力を貸したいと思っています。



### 大変だったこと

私が出産したころは育児休業を取得する人はいませんでしたし、何より研究がしたくて産休だけで復帰しました。子どもが2~3歳まではずっと睡眠不足でした。敷地内にある保育園に7時にお迎えにいらしても通勤に1時間かかり、帰宅は夜8時、なんとか9時には子どもを寝かせ、自分も寝てしまい、2時くらいに起きて家事と仕事をする生活が続きました。私には限られた時間しかないの、朝は早くに出勤して、必死にやりくりしていました。

でも子育ては楽しいし、大変なのは人生のいつときです。